

■ 哀悼を捧げる

一人の実直な人物が、忽然とこの世から姿を消した。青田さんは、狭心症で心臓のバイパス手術（平成 7 年 1 月 30 日）を受け（こちらは完全に回復）、その後肺がんの手術を二度受けている。一度目の肺がん手術ではあまりダメージを感じなかったが、二度目の手術後は気丈な性格に少し寂しさを滲ませていた。一貫して手術治療を受けた東海大学病院は自宅から近い。もっとも心臓手術後、予後を心配して退職後も、伊勢原市内に住家を自ら求めたのである。出身は福島県相馬市であるが、その後お墓まで用意して、今回執り行った浄土宗「大宝寺」では、「檀家としての役目を務められ、また写経にも熱心に努力され、自分のことは語らず静かなお方で、ほかの人の模範であった」と住職は語った。

1 月 7 日、知らせを受けて急遽海外出張先から帰国し病院に駆けつけた、次男の姿をみて安心し逝去された。享年 80 歳 3 ヶ月。喪主の長男が会葬お礼で、父は「悔いのない人生を送れたこと、母のことだけは頼む」と、言って息を引き取られたとのことであった。

■ 思い出

青田さんは昭和 2 年生まれの最後の陸士（61 期）で終戦を迎えた。その後、仙台工専（現東北大学）土木科を卒業し、昭和 23 年内務省（総理府建設院水政局治水課）に入省。昭和 25 年には建設省東北地方建設局胆沢（いさわ）建設現場の石淵ダム（日本最初のロックフィル）に従事した。（昭和 23 年 7 月 3 日、内務省は解体され、建設院が建設省として設立された）。

昭和 26 年 9 月、戦後の荒廃した日本を立て直すためには、電力確保が喫緊の問題であるとのことで、半官半民の電源開発株式会社が設立された。技術者は、官庁や各電力会社から募って構成された。最初に手がけたのが有名な天竜川に造られた、佐久間ダム（重力式コンクリート）である。ここに若き青田技師は、夢を抱いて赴任した。ここでは当時、天皇とさえ言われた有名な永田年所長に鍛え上げられたが、

それでも後年随分慕っておられた。

次の現場が、奈良・三重・和歌山県境に聳える大台ヶ原に源をもつ、北山川の池原ダム（重力式コンクリート）の施工である。ここの現場に、昭和 40 年のある日、日本国土開発の石上立夫副社長（6 年後社長）が、青田さんを招聘に訪れた。

その年に日本国土開発に入社して第二の人生（38 歳）を歩むことになる。

私（昭和 35 年電源開発から国土に転職）が青田さんの存在を知ったのは昭和 44 年頃、まだ現場主任の時、所長会議の末席で聞いた青田さんの発言内容が、他の所長と全く異なる正論を述べられたことに強く心を打たれた。

青田さんは、東名高速道岡崎へ赴任し、次いで掛川、菊川工区の施工。その後、西伊豆スカイライン、国道 246 号小山工事などを経て、北陸自動車道高岡工区を責任者として施工した。

昭和 46 年には、当時の原三郎名古屋支店長の下で初代金沢営業所長、その後名古屋支店の土木部長に就任し、副支店長から支店長、平成元年には専務取締役東京支店長就任となる。

平成 4 年、青田さんは石上会長から関連会社である国土開発工業の社長に指名された。その時、私も誘われて名古屋支店から移籍し厚木に赴任した。

平成 10 年 12 月、親会社の日本国土開発が会社更正法を申請して、大打撃を受けた。（石上会長はすでに他界）その責任を痛感して、出処進退に遅疑逡巡があってはならないという考えで、平成 11 年 3 月末退任した。

曲がったことの嫌いな、さらには相馬で育まれた教育と相俟って、高い倫理観の持ち主であった。最後まで、陸士で鍛えられた精神と強靱な体力、病気などには負けないという気概が窺えたが、がんが^{むしば}蝕んでしまった。一方、心の痛みのわかる心の優しいスケールの大きい人であった。私にとって人生の大先輩を失った悲しみは、当分癒えないであろう。 合掌

平成 20 年 1 月 20 日 記